
初恋なんて、ぶんなぐっちゃまえ！

ハルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋なんて、ぶんなぐっちゃまえ！

【Nコード】

N4664Y

【作者名】

ハルカ

【あらすじ】

道場の跡取り娘の私。自分でも女らしくないのはわかってる。でも、あなたの前では女の子らしくしたいし、ちゃんと『女の子』として見てもらいたいのに…あなたはいつも、私に勝負を持ち掛ける。どうして、女の子らしくさせてくれないの？あなたにだけは、私を『女の子』として見て欲しいのに。

1

私の名前は加賀 飛鳥。じいちゃんの代から続く、加賀空手道場の跡取り娘。門下生は50人弱。道場としては小さくもなく、大きくもなく、といったところか。

私はその門下生達に混ざって、道場の娘らしく小さい頃から空手をやってきた。中学、高校では全国大会にも行ったし、自分でもそこ強い、と自負してる。

そんな最強空手娘な私は、今年18歳になったが、お付き合い経験ゼロ。

私が強すぎるせいか、女の子らしくないせいか……。このままじゃあ、男っ気なしの寂しい人生を過ごすのかな……。なんて思っちゃったり。

：でも、彼氏ができないのは、私が男の人に敬遠されてるから……。だけが理由じゃないって、私もわかってる。

カッコいい人や優しい人。男らしい人に可愛い男の子。門下生はほとんど男性だから、色んなタイプの男の人を見てきた。それなのに。

どんなに素敵男子であっても、凛々しい男前であっても。

私は心を奪われたりしない。

もうずいぶん昔に、ある人にあげちゃったから。

2

あれは小学校1年生の時。学校からの帰り道、いつも素通りする公園から声が聞こえた。

気になって覗いてみると、ランドセルを背負った男の子が3人、うずくまった女の子を囲んでいた。

「…や…だっ…め、て…」

膝に顔を押し付けて、泣いているみたいに見えた。か細い声が、必死でやめたと伝えている。

ぎゃははっ、と下品に笑いながら、周りを囲んでいた男の子の1人が、女の子を蹴った。

「——っ…」

声もなく、泣き震える女の子。それを見た瞬間

ぶちっ

私の頭の中で、音がした。

そして、気がついたら鼻血吹いて泣きわめく男の子達。確か、飛び蹴りしてぶん殴ってぶん投げた気がする。

「まゝまゝに言いづけてやるうーっ!!」

泣きながら捨て台詞吐く奴らに、「それなら虐めでうったえてやるー!」って言い返したっけ。

ちょうどその時ハマってたドラマが「家政婦は訴えた」だったから、当時はすぐ訴えてやるって言ってた気がする。

結局、奴らのママは出てこなかったけど。

「だいじょうぶ? わるい奴らはわたしがぶっとばしたからね」

へにゃっと笑って頭を撫でると、その女の子は大きな目をぱちくりさせて

「…あり、が…と」

って、まだ涙が滲んだ赤い目元をほころばせて、まぶしい笑顔を浮かべてくれた。

その笑顔がすごく可愛くて、綺麗で。私は不覚にも、この時彼女に―――いや、彼に心を根こそぎ奪われてしまった。

3

あれから年月は過ぎて、私も18歳、高校3年生になった。

「…………夢か」

なんて懐かしい。私も、あの頃はまだ今よりも可愛いげがあったかもしれない…

「あすか！覚悟…っ！！」

気合いと共に壊す勢いで部屋のふすまを開けて、侵入者が飛びかかってくる。

「ちえいっ！」

どごっ

…寝起きでも確実に瞬殺できてしまう私が怖い。もう条件反射になっているようだ。

「今日もご苦労様、武」

ふう、と一息ついて部屋のカーテンを開ける。朝日が目にまぶしい。

「……うるさい」

私のベッドに倒れ込んでいる美青年。顔と体つきは文句ないくらいに素晴らしいのに、今は冷や汗かいてお腹を押さえて唸ってる。…今日も、いいところに拳が入ったみたいだ。

「ていうか、まだ6時にもなってないんだけど」

責める目線でジロツと見れば、持ち直したらしい、彼——早川 武はむくりと体を起こした。

「邪魔したな」

言い置いて、すたすたと退出する。まるで何事もなかったかのように。

こんなやりとりが、日常になってきている。

「ねえ、それってどう思う？」

「どうって言われてもな…」

筋骨隆々の男、平安は朝食の鮭をつつきながら、うむむとまごつく。

「やっぱり、私が嫌いなのかな…」

しゅん、とうなだれる。ここ最近、武は私と顔を合わせる度に勝負をし掛けてくる。

最初に武と勝負をしたのは、武の入部初日。あの虐め事件から間もなく、武がうちの道場に入門してきたのだ。

ぶかぶかの道着に身を包んで、帯を締めすぎなくらい締めて、私に勝負を申し込んだ。

「あすかちゃんっ、勝負しようっ！」

試合前からうるっと涙ぐむ武が可愛くて、優しく1撃でのしてやった。

私はまだこの時、武が可愛い可愛い女の子だと思っていたし、自分の気持ちに気づいてなかった。

負けた悔しさでえぐえぐ泣きじゃくる武に、じいちゃんが「男なら泣くな！」って叱っているのを見て、初めて気づいた。

あんなに綺麗で可愛くて、まぶしい笑顔のあの子は、男の子だった。
…少しだけ残念で、ちょっと…ほっとした。

小学1年生の私は、その気持ちを変なの、と思いつつ、すぐに忘れてしまった。

それから、可愛い武は私に勝負を申し込む。それは決まって、月の始めの1番最初の日。なんでかな、とは思った。でも武に聞いても、笑ってはぐらかすだけ。

でも、小学2年生になって、私は武が1日にこだわる意味に気づいた。私が武を助けたの、4月1日だからだ。

その日はちょうど私の住む地区で小学校入学のお祝いと健康を願う行事があって、その地区に住む小学生は皆ランドセルを背負ってお寺に行くのだ。

珍しい行事ねー、と隣の地区の綺麗なおばさんが驚いていたのを覚えてる。普段挨拶をするだけの顔見知りのおばさん…その人が武のお母さんだって、後で知ってびっくりしたけど。

虐めっ子達もランドセルを背負ってたから、同じ地区の奴らが情けない、と思った事も重なって、4月1日は忘れられない日になっていた。

なるほど、強くなって私を倒して、黒歴史だったあの日の記憶をチャラにしたいのかな。

単純にそう思った。じゃあ、負けてあげれば？って思う人もいるかもしれないけれど。

道場を継ぐ娘として、そんな生半可な事はしたくなかったし、武にも失礼だろう。

そう思って、毎回全力で相手をしていた。

小学校低学年の頃、私は武に圧勝していた。まさに秒殺といった具合に。

小学校高学年になって、武も徐々に力をつけてきた。まだ試合の形にならずとも、武の勘の良さやしなやかな身のこなしは、私に手応えを感じさせた。

中学生になって、武は体つきが格段に男らしくなっていた。背も伸びて、筋肉もついて。それに伴って、私に及ばずとも、道場内では結構な強者に数えられるようになった。

厳しい鍛練の成果か。はたまたじいちゃんの説教のせいかな。精神面も鍛えられたらしい武は、泣かなくなった。大きな目はハッキリとした意思の強い目になり、涙を浮かべることはもうない。一人称も『僕』から『俺』になった。あの頃は可愛い女の子に間違われていた武は、綺麗な男の子になった。

そして現在、高校生になって。彼は日々鍛練に明け暮れ、目覚ましい成長を遂げた。もう彼に敵うものはほんの一握り。先輩の門下生でさえ、床に沈めてしまう。

その武を倒せる一握りが、私とじいちゃん。お兄ちゃんは体格には恵まれたが、優し過ぎる性格のせいで、格闘技には向いていなかった。なので空手を習いたがらず、私が道場を継ぐ事に。

それが別におかしいとも思わないし、毎日ピチピチのスーツと優しげな笑顔で仕事に向かうお兄ちゃんを見ると、やはり私が継ぐべき、と思う。

ところで、私がさっき武を倒せる、と言ったが。道場の跡取りとして幼き日々からめちゃくちゃに鍛えられた私は、自分で言うのもなんだが飛び抜けて強い。

だから、いち高校生の武が敵わなくとも、何ら不思議ではないのだ。

不思議ではない、のだが――最近の武の實力は、私に並んできている。ここ何回かの勝負では、ひやり、とした事もあった。

だから、私は戦術を変えた。一撃必殺。一発で仕留めなければ、負けるかもしれない：そんな不安があるからだ。

それほどまでに、武は強くなっている。

――私を倒すために。

同じ道場の門下生として、同等の實力を持つライバルができたのは純粹に嬉しい。でも、そのライバルが自分を倒すため『だけ』に技を磨いているというのは、いかがなものか。

中学生の始めに、私は武に提案したのだ。「大会に出てはどうか」と。今の武なら、入賞は間違いないと思ったから。

でも武は、それを断った。「俺が強くなる理由は飛鳥を超える為だけだ。賞なんて興味ない」と、ギラギラとした眼差しを寄越しながら、バツサリと切り捨てた。ばかな。そんな理由ありだろうか。

でも、本当にばかなのは私だ。とんでもない事を言われているのに、武のその強い眼に、心がじわり、と熱くなった。この男は誰だろう。

武なのに、まるで別人の…全然知らない、『男』みたいだ。変な気持ち。胸の奥がむず痒いような…

唐突に、私は、はっ　と小学生の頃の気持ちを思い出した。武が男の子だと知った時。あの時感じた、安堵の気持ち。あれは、好きな人が男の子でよかった。という気持ちだったのでは。

すとん。と何かが胸の中に降りてきた。

ああ。なんだ私、あの時の綺麗でまぶしい笑顔の武に恋しちゃったんだ。

…なのに、武にとって私は『倒したい相手』でしかないんだ。

皮肉だなあ、恋心にやっと気づいたのに。

…私、女の子だって、思われてない…

小学生からの恋心に、高校生になってからやっと気づいたのに。

女の子として見てもらえてないどころか、ただのライバル。

しかもそのライバルの座でさえ、武が力をつけてきた今は危うい。

もし、私が負けたら…なんとなく想像してみる。

「飛鳥、勝負！」

びしぱしっ

「きゃーっ、やられたあ！」

「なんだ、案外あつけないな。これで飛鳥を超える事ができたし。お前にもう用はない。じゃあな」

「そ、そんな、武っ！」

待つてよお、おーー！！

鼻水垂らして追いかけてそうだ…

怖い。そんな未来考えたくない。今まで当たり前に一緒にいたけど、私達の関係はひどく危うい事に気づかされる。

私が負けたら、この関係は終わり…

この恋がもう終わっているのは、解った。……でも、武の傍にいたい。

だから私は、負けるわけにはいかない。なんとしてでも、武に勝ち続けなければ。私はかたく、決意した。

「あすか…飛鳥！」

「あっ…なに、お兄ちゃん」

そういえば、朝ごはん食べてる途中だった。

心配そうに私を見る兄、平安の視線に気づかないふりをしながら、箸を動かす。

鮭、冷めてる。どれくらいぼーとしてたんだ私。

「考え事？もしかして、武君の事かな？」

「うぐほっ」

お兄ちゃんが、ぴしゃりと言い当てるものだから、鮭とご飯が喉に詰まってしまった。

「ほれ、水じゃ」

「げほっ、んぐ、ごくごく…ぷは、ありがとう。じいちゃん」

ばあちゃんが綺麗な川のほとりで、洗濯してるの見てしまった。

「武の坊主は、まだ飛鳥に勝てないようじゃの。今朝もしよげて帰っていきおった」

「あらら、残念だね武君」

「ちょっと、残念じゃないでしょ！孫と妹の勝利を祝ってよ！」

かーっかつか！と馬鹿笑いして食卓につくじいちゃん。どうでもいいけど、広げた新聞逆さまだけど。

「でも僕は武君を応援しちゃうなあ」

お兄ちゃんは食べ終わって、食後のティータイムにありつくようだ。ごつい指で繊細なカップを持つ姿は、いつ見てもこめかみがむず痒くなる。

今日も加賀家は自由だ。ちなみにお父さんとお母さんは、去年福引きで世界一週旅行を当てて旅行中。とっくに旅行終わってるはずだけど、まだ帰ってこない。1度「ラブラブです。もう少し愛を確かめあってから帰ります。ちゅっ」とハートまみれのエアメールが来たから、全然心配してない。

「武の応援なんてなくていいよ。妹の応援してよ！」

私、絶対負けるわけにはいかないんだし！

「わしは飛鳥を応援しとるぞ」

さすがはじいちゃん。私の1番の味方なんじゃないか。

「勝負で敵わんようでは、飛鳥を押し倒す事もできんからな。手込めにもできんわい」

「ちょ、ちよつと、何言ってるの！朝から下ネタやめてっ！」

かーっ、と顔に熱が集まってるのが分かる。頭が真っ白になって、意味もなくじいちゃんの新聞をビリビリに破く。

「ごちそうさまっ」

ガチャン、と乱暴にシンクに食器を置いて、2階の自室に引っ込む。

部屋のドアを閉める直前まで、じいちゃんの泣き言と、お兄ちゃんの面白がる声が聞こえて、ふすまを
ばしんっつ

と思いつきり閉めてやった。

ベッドに座り込みながら、ふうっ、と息を吐く。

「押し倒されるどころか、女の子扱いもされてないっつの…」

ごろん、と横になる。今日は休みだし、また寝ちゃおうか…

私は目を閉じて、体の力を抜いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4664y/>

初恋なんて、ぶんなぐっちゃまえ！

2011年11月14日15時26分発行